

自詠じえい  
(菅原道真すがわらのみちざね)

家をいえ離れてはなてさん三四月しげつ

涙をなみだ落とすお  
百ひやく千行せんこう

万事ばんじ皆みな夢ゆめの如ごとし

時時じじ彼蒼ひそうを仰あおぐ

離家三四月 落涙百千行  
萬事皆如夢 時時仰彼蒼

解説 太宰府権帥に左遷させられた後に心境を詠った詩。

語釈 ※離家Ⅱ突如菅原道真は太宰府権帥に左遷させられ、家を離れる。

※百千行Ⅱ百も千も涙が流れる。次から次へと涙が流れるさま。

※彼蒼Ⅱ天を仰いで訴えるときなどという。

通釈 都の家を離れてから、すでに三、四か月。憂いの心の切なさに、次から次へと涙が落ちるのをどうすることもできない。このような身の上となつては、万事皆夢のようである。時々、天を仰いで自らの心を与えるのみである。